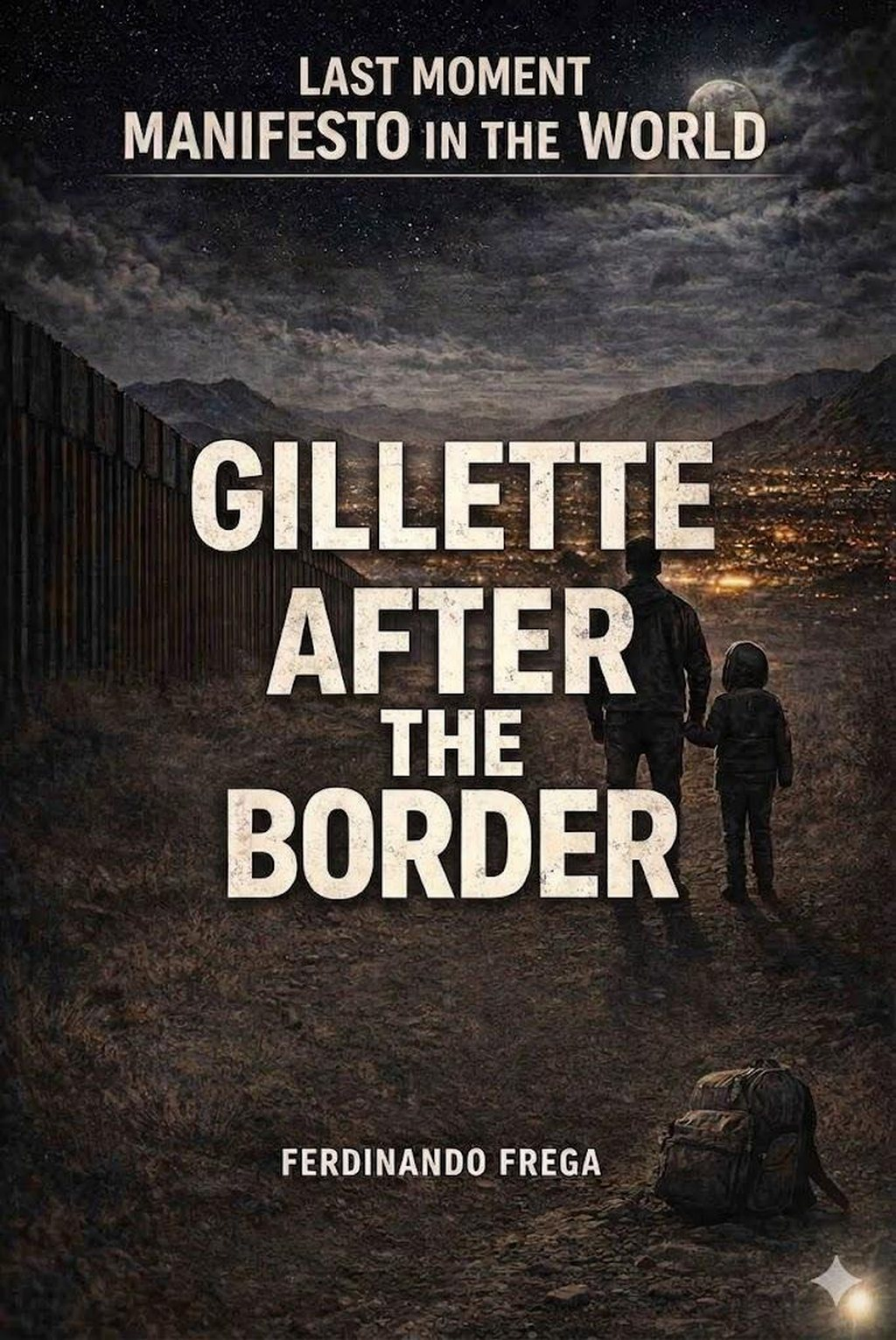
LAST MOMENT
MANIFESTO IN THE WORLD

GILLETTE AFTER THE BORDER



FERDINANDO FREGA

GILLETTE 境界を越えたあとで

壁ではなく閾としての境界についての本。民族、文化、伝統、そして狂気とヴィジョンを隔てる細い線。マニフェスト、境界を旅する人々への献辞、小さな伝記、そして著者が何度も立ち返る問い――境界を越えたあと、人には何が残るのか――を収める。

マニフェスト

ほとんどの人は理解していない。人生を決めるのは私たちが持っているものではなく、他者の中に残す存在であるということを。私たちはただ蓄えるためにここにいるのではない。ひとつの思想を刻み、ひとつの痛みを和らげ、ひとつの意識に火をともすためにここにいる。

人間の境界とは、国家と国家のあいだの線だけではない。自分の時間を消費する者と、それを内なる遺産へと変える者とのあいだの距離である。

境界の向こうに空虚はない。残るものがある。身体を、地理を、恐れを越えて生き延びるものがある。痕跡がある。

献辞

目に見える境界と見えない境界を越えていく人々へ。土地を、言葉を、名前を失い――それでもなお、世界の中で存在する道を探し続ける人々へ。

編集者ノート

このテキストは、単純で根源的なひとつの問いから生まれた。人間として、私たちがいまだに理解していないものは何

か？　その答えは新しい領域を開く。私たちはただ存在するためにここにいるのではなく、他者の中に生きた痕跡を残すためにここにいるのだ。

前提

あらゆる境界は何かを分ける。身体を、地図を、記憶を、権利を、可能性を。だが最も深い境界は、過ぎ去るものと残るものとを分ける。

序文

これは閉ざすものとしての限界ではなく、閾としての限界についてのテキストである。人類は領土を、国家を、防壁を築いてきた――それでもなお、自らの真の尺度が所有するものではなく伝えるものにあることを理解していない。

あらすじ

人間の境界と領土の境界について、そしてそれを越えたあとに生き残るもの――記憶、変容、存在――についてのマニフェスト。

著者の意図

私は、所有ではなく持続を求める何かを残すために書く。ひとつの微笑み、ひとつの思い、ページの向こうへと続いていける、ひとつの近しさのかたち。

はじめに

ほとんどの人は、問いを前にすると急いで答えを探す。私はそうしない。ひとつの言葉から始める。なぜ？

なぜなら、私は期待されたやり方で対話に入ることに興味がないからだ。対話が生まれる裂け目を開きたい。人間が繰り返すのをやめ、本当に問い始めるその地点が欲しい。

私たちが何を理解し損ねているかではなく――なぜ私たちは理解し損ね続けるのか。なぜ所有を意味と取り違えるのか。なぜ痕跡を残しうる存在としてではなく、人生の消費者として時間の中を進むのか。なぜ自分の外に境界を築き、内側で私たちを分かつ境界を無視するのか。このマニフェストはここから始まる。出来合いの答えからではなく、切迫から。公式からではなく、闘から。

最初の問いは立場を求めない。身をさらすことを求める。言葉が表面であることをやめ、必然へと立ち返る地点まで降りていくことを求める。

だから私はすぐには答えない。まず起源の前に立つ。まず傷に耳を澄ます。まず、いまなお思考を開くことのできる唯一の言葉を口にする。なぜ。

この裂け目からテキストは始まる。ここから、人間の、領土の、そして内なる境界についての省察となる。ここから、その先にあるものへの通路が開く。空虚ではなく、残るもの。終わりではなく、痕跡。閉ざすことではなく、生き残るもの。

このマニフェストは、答えではもはや足りなくなる場所に入っていく――そして、人間が隠れ場所なしに自分自身を見つめざるをえなくなる、まさにその地点から始まる。

プロローグ

日本語版

このマニフェストは、人間の、領土の、そして内なる境界の意味を探り、単なる物質的な存在を超えて、存在すること、そして他者の中に残す痕跡の大切さを強調する。

献辞　境界を旅する人々へ

これは、目に見える境界と見えない境界を越え、土地や言葉や名前を失いながら、それでもなお世界の中で存在する道を探し続ける人々に捧げられている。

根源的な問い

著者は、私たちがいまだに理解していないものについての根源的な問いから始め、私たちがここにいるのはただ存在するためだけではなく、他者の中に生きた痕跡を残すためだと断言する。

境界の本質

境界は身体を、地図を、記憶を、権利を、可能性を分ける——だが最も深い境界は、過ぎ去るものと残るもののあいだにある。

閾としての境界

限界は閉ざすものではなく、閾である。人間の真の尺度は、持っているものではなく、送り出すものにある。

人間の境界についてのマニフェスト

人生を決めるのは所有するものではなく、他者の中に残す存在である。人間の境界とは、ただ時間を消費する者と、それ

を内なる遺産へと変える者とのあいだの距離である。

民族と文化

民族は抵抗し、認められることを求める生きた記憶であり、文化は感情のアルファベット――忘却に抗う行為である。

伝統と社会性

伝統は時間に耐える、身体に宿った連続性である。社会性は人間の最初の境界であり、相互の承認を通じてアイデンティティが形づくられる場所である。

狂気とヴィジョンの境界

思考の境界を越える者は、症例とも預言者とも見なされうる。狂気とヴィジョンのあいだの線は細く、しばしば耳を傾けることへの恐れによって引かれる。

所有せずに差し出す

著者は、見返りを何も期待せずに与えると語り、人間の論理と商業の論理とを区別する。マニフェストはひとつの通路である――ページの向こうへと続いていく通路。

世界

民族

世界の人々は数えられる群衆ではなく、動き続ける生きた記憶である。一人ひとりが息をし続ける傷であり、飼いならされることを拒む言語であり、パンだけでは黙らせられない飢えであり、一枚の旗に折りたたむことのできない空である。

民族は前進するのではない――耐え抜くのだ。理解されることを求めるのではなく、認められることを求める。どの民族も生き延びることのアーカイブであり、周囲のすべてが崩れ落ちるときに生き続けるための、唯一無二のやり方である。

周縁の民族などいない。周縁とは、世界がまだ見ることを学んでいない場所にすぎない。

文化

文化は人類を分けるのではない――人類を読めるものにする。文化は感情のアルファベットであり、痛みの地図であり、祝祭の振り付けであり、帰還の幾何学である。

どの文化も意味の実験室であり、生きているという謎にかたちを与えようとする試みである。守るべきアイデンティティではなく、越えていくべき緊張である。

あらゆる文化は、いま、ここに、この身体の中にいるという神秘への、仮の答えである。そしてあらゆる答えは、忘却に抗う行為である。

伝統

伝統とは、時間の浸食に抗うものである。郷愁ではない――身体に宿った連続性である。

繰り返される身振りは習慣ではない。執拗に続く記憶である。受け継がれる言葉は民間伝承ではない。帰属である。分かち合う食卓は契りである。分かち合う喪はひとつの正義のかたちである。

伝統とは死ぬことを拒む過去である――誰も見ていないとき私たちが何者であるかを思い出させるために、そのたびに戻ってくる。

社会性

社会性は人間が越える最初の境界である。話す前に、私たちは触れる。理解する前に、私たちは見る。

私たちは関係であり、摩擦であり、認められたいという欲求である。他者の前では、沈黙でさえひとつの言語である。社会性とは、私と他者とのあいだの境界にひびが入り——存在することの可能性が始まる場所である。証人なしにアイデンティティはない。

小さな伝記

私は、サロンを求めたことは一度もなく、存在を求めてきた書きものの出身だ。思考と、傷と、頑固さと、明晰さの年月を越えてきた。場所を占めるために書いたことは一度もない——消えないために書いてきた。一つひとつの言葉が閾であり、一冊一冊の本が証人であり、一つひとつの身振りが抵抗の行為だった。私の経歴は履歴書ではない——ひとつの軌跡である。私は読者を求めない——証人を求める。

目的

（限界を探ること）

世界の果てに触れる

私の目的は世界を描くことではなく、その限界に触れることだ。

境界の試練としての書くこと

書くことは境界の試練である。語るためではなく、すべてが語られたあとに何が残るかを見るための。

北極

北極は地理的想像力の極限の境界である。氷、沈黙、不在、抵抗。世界が終わるように見える場所――そして実際には、別のかたちで再び始まる場所。どのマニフェストにも、ありえない北が必要だ。目的地としてではなく、緊張として。

北極は、明晰さをもって越えるなら空虚にさえ住むことができるという証である。地図が地理であることをやめ、運命となる地点である。

動物

動物は私たちを謙虚にし、私たちを完成させる境界である。生き物の別の文法から私たちを見つめている。話さない――告げる。説明しない――示す。

動物は世界の生物学的な記憶であり、私たちが中心ではなく通過点にすぎないことの証である。一匹一匹が答えを必要としない問いである――必要なのは存在だけだ。意味を求めない――意味を体現している。

精神科医か、症例か？

最後の問いはこれだ。ヴィジョンか、逸脱か？　預言か、症状か？

思考を境界の向こうへ押し出す者は、声として聞かれる前に、しばしば症例として読まれる。あらゆる新しい言語は、少なくとも一度は診断の疑いをくぐり抜ける。

狂気とヴィジョンのあいだの境界は細い――そてしばしば、耳を傾けることを恐れる者たちによって決められる。

私は診断を求めない——注意を求める。正常さを求めない——真実を求める。

著者あとがき

生涯を通じて、私はいつも与えることに喜びを見いだしてきた。奪うことにではない。六十一年間、それが私の変わらぬ唯一の性分だった。抱え込むのではなく、差し出すこと。そしてここでも、私は自分自身であり続けることしかできなかった——私のポケットではなく、人々の心に残るべきものを残すこと。

世界の出版業界には奇妙な信念がある。無償で与えられるものには価値が乏しいに違いない、と。贈り物として差し出された本は、価値の劣る本だ、と。

それはビジネスの論理であって——人間の論理ではない。その論理でいけば、Bezosはプライベートジェットではなくバスに乗るべきだ。あはははは。それくらい馬鹿げているのだ。

私はその逆をする。受け取りたいと願うものではなく——差し出せるものを与える。

その違いは小さく見えるが、そうではない。それは所有と存在を、計算と寛大さを、市場と痕跡を分ける線である。

このマニフェストは製品ではない——ひとつの通路である。見返りを何も求めない身振り。私がもう歩けなくなっても歩き続ける、私の断片。

ありがとう。そして楽しんでほしい——その言葉の最も真剣で、最も軽やかな意味において。

結び

本当の境界は大地の終わりではない。何も残さずに通り過ぎるか——それとも存在となるかを決める、その瞬間である。

Ferdinando Frega